

## 内湖および周辺水域で肥育したセタシジミの肥満度と生残

井戸本純一・磯田能年・竹岡昇一郎（（公財）滋賀県水産振興協会）

### 1. 目的

近年、主要漁場における産卵期のセタシジミ親貝の肥満度が低下する傾向にあり、再生産力の低下が懸念される。そこで、繁殖助長のために琵琶湖へ放流する親貝をいったん栄養が豊富な西の湖をはじめとする内湖や琵琶湖の沿岸水域に垂下し、肥育効果を検証した。

### 2. 方法

2015年11月および2016年2月に沖島、彦根、長浜の各漁場で採捕した合計約620kgの親貝を開孔形状の異なる浅いプラスチック容器に4kgずつ収容して西の湖に垂下した。また、11月に採捕した親貝の一部を同様に他の内湖および琵琶湖沿岸水域に垂下した。

定期的に親貝を抽出して肥満度を測定し、西の湖は2016年4月、ほかは5月に取上げて生き残った親貝を計量した。

### 3. 結果

西の湖に垂下した親貝は、沖島産と彦根産は3月に肥満度が急上昇し、長浜産は上昇が緩やかであったが、放流時（5月）の肥満度は3.6%~4.0%といずれも同時期の天然貝（3.5%）よりも高かった（図1）。生残状況は容器の形状にかかわらずおおむね90%以上（重さの歩留まり）と高かったが、2月に採捕した彦根産のみ60%を下回った（図2）。

西の湖以外では、水域によって時期に差があるものの、松の木内湖を除いて西の湖と同程度の肥満度の上昇が見られた（図3）。しかし、堅田内湖、乙女ヶ池および赤野井湾では、西の湖に垂下した同じ親貝とくらべて生残率が大幅に低かった（図4）。

今年度は天然貝の肥満度が一定の水準まで上昇したために相対的な肥育効果は小さかつ

たが、西の湖以外の内湖や琵琶湖の沿岸域でも親貝肥育が可能であることが示唆された。

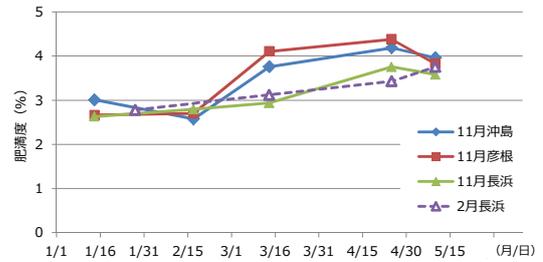


図1 西の湖垂下親貝の肥満度の推移。

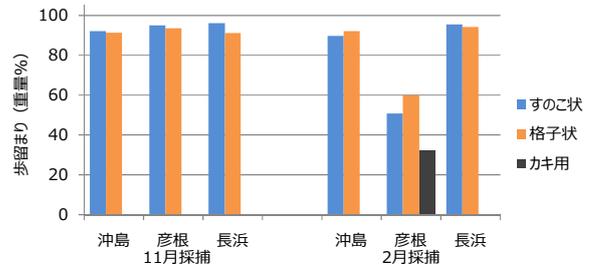


図2 西の湖垂下親貝の収容器別生残状況。

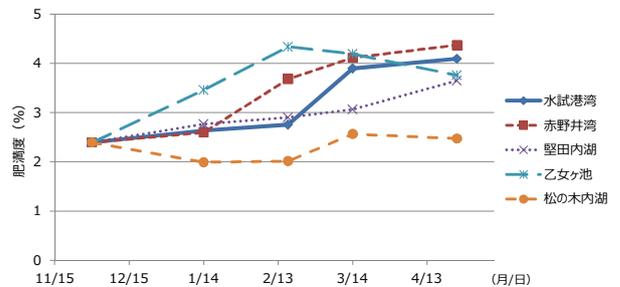


図3 西の湖以外に垂下した親貝の肥満度の推移。

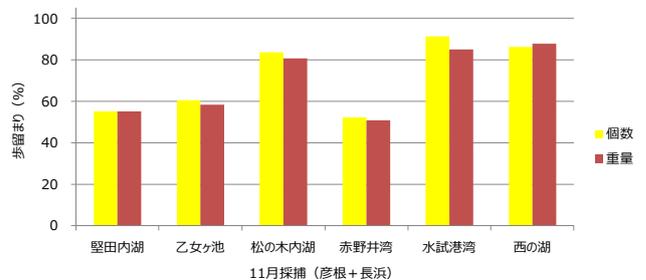


図4 垂下した水域別の親貝の生残状況。

肥満度(%)=貝の中身(軟体部)の乾燥重量/貝全体の重量(貝殻および内部の水を含む)×100

本研究は平成28年度二枚貝資源緊急増殖対策事業(水産庁)を実施する(公財)滋賀県水産振興協会と共同で行った。